

再生可能エネルギーが地域を豊かにする! 映画「日本と再生」

APLAでは、二本松有機農業研究会が計画しているソーラーシェアリング(農地の上で太陽光発電をする仕組み)のパネルサポーター募集に協力しています。その関連で、1月にトークイベント「再生可能エネルギーが地域を豊かにする」を開催し、パネルサポーターになってくださっている方をはじめ、多くの方にご参加いただきました。



当日ダイジェスト版を上映したドキュメンタリー『日本と再生』は、ぜひ多くの方に観てもらいたい映画です。クリーンなエネルギーでこんなにも地域が豊かになるのだということが、国内外での取り組みを交えて明らかにされています。今世界中で起こっているエネルギー構造の変化を体感でき、観終えると、未来は明るい!と希望が湧いてきて元気が出てくる映画です。

全国各地で上映会が催されていますので、ご興味のある方は下の公式サイトから情報をご確認ください。3月11日からAmazonでもDVDの販売が開始されます。公式サイト:<http://www.nihontogenpatsu.com/>



大久保ふみ(おおくぼ・ふみ/APLA)
パネルサポーターも随時募集中! 詳しくはこちらまで。
<https://www.apla.jp/activities/fukushima-japan>



特定非営利活動法人APLA(Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島での30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp
株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
バラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者の顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <http://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F 過去のPtoP NEWSはこちらから
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp 特定非営利活動法人APLA

人から人へ PtoP NEWS vol.24 2018.03

ピープル NEWS vol.24 2018.03



特集

バラゴンバナナ 民衆交易の悩み事



ココが知りたい! コーヒー



アラビカの実(左)とロブスタの実(右) アラビカ(左)とロブスタ(右)

巷で売られているコーヒーには、「アラビカ100%」と表示された商品を多く目にします。アラビカは、コーヒーの中の品種の一つ。コーヒーの品種は、大きく分けて、アラビカ、ロブスタ(カネフォラ)、リベリカの3種類に分類され、主にアラビカとロブスタが流通しています。

アラビカは、標高の高い地域(主に標高1000m~2000m)で栽培され、香味が優れているため高値で取引されますが、病虫害に弱いので生産者の苦労は多い品種です。一方、強い苦味とコクが特徴のロブスタは、標高の低い地域(主に標高300m~800m)で多く栽培される病虫害に強い品種です。ちなみに、アラビカの中でもロブスタとの交配種も存在します。東ティモールで主流のアラビカ種「ハイブリット・デ・ティモール」は、アラビカとロブスタの自然交配で生まれた品種です。オルター・トレード・ジャパン(ATJ)が輸入している東ティモールのコーヒーは、生まれながらにアラビカの香味豊かな味わいとしつかりとしたロブスタの苦みの両方が備わっています。アラビカとロブスタを飲み比べる機会は少ないかもしれませんが、品種を意識して飲んでみると、一層コーヒーの奥深さを感じられるかもしれません。

中村智一(なかむら・ともかず/ATJ)

コーヒーの品種に関する詳細 <http://altertrade.jp/coffee/basics>



産地の暮らしを垣間見る
1枚の写真から

ママ・ママ・パパアいちば

from インドネシア

パプア州 ジャヤプラに先住民族の女性たち(ママ・ママ)だけが農産物を買ういちばがあります。このいちば、一歩足を踏み入れると他のいちばとは雰囲気が違うことに気づくはず。いちば特有の売り買いの活気がなく、売る人は地べたに座っておしゃべりしたり、編み物したりしています。必死に売るという意欲に欠けるなあ。でも、売る人も買う人もんびり、リラックス。これがパプア流。しかし、政府はコンクリートの建物の中に売り場を作ろうと計画しているそうです。これにパプアの女性たちは大反対。「私たちは地べたに座って売るのが好きなのよ!」とこの時ばかりは熱く訴えています。

津留麻子(つるまきこ/ATJ)

特集



balanゴンバナナ 民衆交易の悩み事

from フィリピン

新規作付けの様子

このところバナナの需要が多い春に、ほぼ毎年天候被害など思うようにバナナの収穫が出来ないことが続き、消費者の皆さんにバナナを十分にお届け出来ない状況が続きました。

そこで昨年(2017年)は、生産者と協力しながら、春に収穫できるようにバナナの苗を植え付ける時期を意識する、ということを試みました。日本のバナナ全般の消費動向をみると、5~6月がピークで、最も売れない冬場はピーク時の80%くらいになります。バナナの収穫量が増え、需要が落ちる冬期はバナナが売れずに余ってしまうという事態に昨今苦しんできました。

バナナは多年草で、植え付けから最初の収穫までは約1年かか

り、その後はわき芽を生育させてまた半年から1年後に2回目の収穫と続いていきます。日本側は最初の植え付け時期だけでも意図的に4月前後にしてほしいと考えていましたが、根付きやすい雨期(6~11月)に作付けするのが自然という意見もあり、なかなか実現してきませんでした。

今回現地側でも「日本からの提案を試してみよう」ということになったのですが、残念なことに苗の配布が遅れ、作付け時期が予定よりも遅くなってしまいました。そのため、次の春に収穫量が増えるかは微妙な感じですが、まずは産地でも作付け時期を意識してもらえたこと自体が一步前進だと考えています。

実は色々な問題を抱えている balanゴン

また、品質問題も大きな悩みの1つです。日本での最終検品段階で、ネグロスの一部の産地やパナイ島の balanゴンバナナに、カビや腐れで廃棄になってしまうバナナが多発しています。フィリピン各島での選別段階では問題ない(ように見える)のです。原因究明に取り組んでいますが、あちこちに散在する大勢の小規模生産者からバナナを集荷しているため、細かいトレースが難しく苦労しています。バナナは収穫・箱詰め後にマニラまで運ばれ、再検品され国際船に積み替えられて、日本に送り出されます。

価格についての課題もあります。最近の balanゴンの需要は2010年度に比べると約2割減少しています。販売量を回復させていくために価格の問題は避けて通れませんが、フィリピンからの出荷価格の上昇に伴い、日本での販売価格も上昇しています。フィリピンでは毎年6%の経済成長が続き、物価も上昇しています。その

ため生産者からの買い取り価格は上がる方向にはあります。また、 balanゴンの半分ほどは一般のバナナに比べて日本への輸送コストのかかる島からのもので、物流コストのかかる中山間地の小規模生産者のバナナを集荷しています。安全性(農薬不使用)と品種(balanゴン)だけを求めるのであれば、物流コストの安い地域で集中して栽培すればいいのですが、 balanゴンバナナ民衆交易の目的は、単に利益を求めるものではなく、人びとの出会いや連帯による事業であって、その精神は今でも変わりません。品質改善(廃棄率減少)などのコストカットを続け、生産者・消費者が納得する価格を維持できるように努めていきます。



日本の選別段階での品質不良のバナナ(キズで黒くなっている)

悩みや課題は尽きないけれど

課題山積ではありますが、うれしいニュースもありました。2017年4月、西ネグロス州の生産者のレニボイ・ソンプリアさんが州政府から、果樹の有機栽培部門の優れた農家として選ばれ、賞が贈られたのです。レニボイさんは、3年前に開かれた balanゴンバナナ関係者の集いにおいて、父親を早くに亡くし苦労したこと、かつて集荷所が遠かった時には、収穫した balanゴンを山や川を越えて運んでいたこと、 balanゴンの収入で家族を養うことができていたことを涙ながらに発表してくれました。地域のリーダー的な存在で、優しく落ち着いた印象だったので、人前で涙するのが意外で、思わずもらい泣きをしてしまいました。レニボイさんの夢として、頻繁に修理する必要がないコンクリートの頑丈な家を建てること、3人の子供も全員が大学を卒業し、それぞれが良い生活を送れることを挙げていました。

生産者の顔を思い浮かべながら、 balanゴン事業を取り巻くピンチをチャンスに変えるべく、今年もがんばります。

松本敦(まつもと・あつし/ATJ)



レニボイ・ソンプリアさんと家族



balanゴンバナナの詳しい産地レポートはこちらから ☞ <http://altertrade.jp/balargon>